
0 から始まる

嘘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

0 から始まる

【Nコード】

N 3 7 4 4 U

【作者名】

嘘月

【あらすじ】

これは、誰も知っているようで知らない殺し名『無名』の話である。

存在しない話（前書き）

始めに始まる始めのお話

存在しない話

0 は最初に始まり最後に終わりにいつも不思議な数字

『殺し名一位「勾宮」』

『殺し名二位「闇口」』 『殺し名三位「零崎」』

『殺し名四位「薄野」』

『殺し名五位「墓森」』

『殺し名六位「天吹」』

『殺し名七位「石凧」』

殺し名一位「勾宮」「殺し屋」

殺し名二位「闇口」「暗殺者」

殺し名三位「零崎」「殺人鬼」

殺し名四位「薄野」「始末番」

殺し名五位「墓森」「虐殺師」

殺し名六位「天吹」「掃除人」

殺し名七位「石凧」「死神」

殺し名一位・二位・三位は強いだが0位よりは弱い

0 位は最強最弱そんな一族の名前は誰かが決めて決めなかった『無名』の物語であり物語ではない。

存在しない話（後書き）

感想・ご意見などしとお待ちしてまーす

零崎人識との出会い（前書き）

別にどうでもいい話…なわけないか（笑）

零崎人識との出会い

僕の名前は、嶋崎志向しまざきしゅうへい

今日は、始業式で新高校二年生だ

僕は、生まれたときからこの島（無名）に住んでいる

「あつという間に二年生だなくって完全に遅刻だあゝ」

定番の遅刻登場であつた。島には、小・中・高の一貫性の学校が一つだけあつただから島に住む人は、皆同じ学校で仲が良かった。

嶋崎が、学校に急ぐため近道の海沿いを走っていると海に小型の船が、反転しているのを見つけた。

（こんな小さな船でどこに行こうとしてたんだろう…馬鹿な人もいるんだな）

嶋崎が船を見ていると（もちろん足は止めてはいないのだが）船に人が捕まっているのが見えた。

嶋崎は、別にその人が生きようが死のうがどちらでもよかったのだが、持ち物に金になるものが、あるかも知れないし…

何より身体は、魚やサメが食べるとして持ち物や着ている物が、ゴミとして海にいくのが、許せなかった（海を愛する男なのである）。そうして走る方向を変えて海に飛び込むとあつという間に船がある所まで泳いで分かったことは、漂流している人は、身長が自分と変わらない（約150cm）くらいで髪が斑に染まっっていて顔に刺青がある事がわかった。

嶋崎はずっと島にいたから刺青など見たこともなく髪の色を染めて

いる人も見たことなくましてや斑に染めている人なんて…どう見ても変人だった

零崎人識との出会い（後書き）

ご感想・ご意見としどしお待ちしてまーす

暇潰し（前書き）

短い話ですが更新します

暇潰し

結局、海に飛び込んでしまい服は、びしょびしょに濡れてしまい身体が重いなか＋斑髪の少年「刃物付き」を担いでいるもんだから当然のように学校には、遅刻＋少年の仕込みナイフや服に付いているカミソリなどで服は所々切れており血が滲んでいる箇所も少なからずあった。

「今日はとにかく災厄の日だったな」

時間帯も昼となり学校では昼休みで一人、嶋崎は、袴姿「日本古流武術（所属）『主将』部員数1」で机に顔をうずくまっていたところに、担任がやってきて少年が目覚ました事を教えに来て怠そうに保健室に向かうと……

「俺の体を返しやがれー」訳の分からぬ事を叫びながら保健室をめちゃくちゃに散らかして、布団の綿が沢山飛び出しているベッドの上に立っていた

「俺の体を返せってどういう事だよ」

「お前が、俺の服や刃物をとったのか」

さっきから斑髪の少年が言っている体とは、身体中に隠れていた刃物のことであることに気付いた嶋崎は、懐に入れて置いたサバイバルナイフを返した。

「他の刃物は、どこだ」

刃物を渡してから少し落ち着いたのかベッドにあぐらをかいた

「他の刃物は、家庭科室においてあるし着替えもそこに干してあるよ」

「はあ、傑作だぜ『零崎』の俺が一般人のそれもガキから助けて貰って上に命ように大事な、刃物を全部取られたなんてよ大将達が、知ったら笑い死にされちまうぜ」

暇潰し（後書き）

ご感想・ご意見ともしお待ちしてまーす

眩き（前書き）

よろしく願います

眩き

その頃、とある海の上の人識が乗ってきた古い船とは比べ物に成らない最新式の大型の船が、航海していた

「人識は、”あの島に着いただろうか？」

「あいつなら着いてるちがいないちゃ」

「島の住民を殺してなければいいが」

「何を、殺人鬼が言ってるだっちゃ」

「ふふ、それもそうだな。あとどれくらいで島に上陸出来そうだい？」

「この嵐を耐えれば3時間くらいだ、だがこの嵐に耐えきればだか……ここで三人一緒に死ねるなら悪くない」

丁度そんな話をしている頃人識というと……

「ヘックシュン！！誰か俺の噂をしてやがる」

「人識くん授業中ですよお静かに」

学校の授業を受けていた……いや正確には、受けさせられていた。

「……で、なぜ俺は、こんなガキ共と一緒に勉強しねーといけな

いだー!!」

「だって人識くんは、未成年で保護者がいないとなると、ここは、やはり保護するのが当然だと思いますが……」

「だからって授業を受ける必要は、ないだろうよ」

「それは……ついでにです」

先生が、ニツコリ笑いながら首を傾けた。

「……ははは、傑作だせ零崎の俺がこんなガキ共と一緒に勉強とはな」

眩き（後書き）

ご意見・ご感想とじしお待ちしてまーす

休憩（前書き）

ご意見・ご感想としどしお待ちしてまーす

アクセス数 1000 越えました（笑）

小さいことですが読者の皆様ありがとうございます

休憩

『キーンコーンカーンコーン』

「はい、これで今日の勉強を終わりにしたいと思います皆さん寄り道せずに帰ってくださいね」

「ハ―イ、先生さようなら―」

「はいサヨウナラ人識くんもサヨウナラ」

「……………」

「……………？人識くんなんで何も、話してくれないんですか？」

「……………ぬ……………」

「ぬ……………？どうしたんですか？」

「……………と……………れ……………」

「……………？……………」

「先生、取り合えず人識の縄と布を解いてやって下さい」

二人の会話を聞いていて呆れたように嶋崎が言った。

「そうでしたそうでした道理で人識くんが捨てられた子犬みたい目で先生を見ていたんですね。てつきりそんな先生をみるから、先生に惚れたかと思いましたよ。」

そんな先生が話を無視しながら嶋崎は、ロープと布を取っていた。

「おい、先生よオレをこんな事をしたんだから覚悟できてるんだろ
うな！」

「どういうこと……」

先生は、最後まで言葉を言うことが出来なかった、なぜなら人識が突然指を動かしたとたんに先生が身動きがとれなくなった。

「……人識く……ん」

「今更謝つても許してやらねーからなついでに、言つとくとこの技は、曲絃系つていうんだ身体をギチギチ縛つて反省して貰うぜ！」
人識が薄気味悪くニヤニヤしていると

「人識、早く先生の拘束をといて逃げた方がいいと思うが」
「うるさい！泣いてわめいて漏らすまで絶対止めねえぞ！」

「……そうかなら気を付けてな……先生さようなら」

嶋崎が教室を出て行った

「……何を言いたかったんだあいつわけの分からないこと言いやがつて……」
つと先生さんよ身動きが取れなくなったとたんに喋らなくなつたな。なんだ、後悔でもしてんのかよとにかく何か喋れよ」

人識が糸を引く力を強めると

「……も……つと……」

「何だつて聞こえないぞ」

その頃廊下を歩いている嶋崎が軽く後悔していた。

「やっぱりあいつに教えてやったほうが良かったかな先生は……変態で……」

「うわあああ!!」

丁度、嶋崎が独り言を言っているとドタバタと後ろのほうから叫び声と一緒に聞こえて来た。

「……やっぱり駄目だったみたいだな」

休憩（後書き）

ご意見・ご感想とじしお待ちしてまーす

逃走（前書き）

短い話やけどよろしゅう

逃走

「何なんだよあの先公は、うちの兄貴……いやそれ以上の変態じゃねーか！それに、何だって特殊ワイヤーが、簡単に切られるなんて本当の本当に、傑作だな」

「だから俺は、逃げた方が良いつて言ったのに聞きもしないで先生を、縛ったりするから……あの人は、超が付くくらいドMなんだから」

「そんなこと先に……って隠れる！」

人識が嶋崎の手を強引に引っ張りドアの開いている部屋に飛び込んだ。

「何処に行ったのかしら二人ともまだ□■●（強制自粛）なのに」

「……おい、あの人は、先公何だよな？」

「ああ……先生だ？」

「何だよ今の妙な間は、あと何で最後に？がついた」

二人が口論していると遠ざかっていた足音が凄く速度で近くなっていくのが分かった。

「ばれちまったじゃねーか迎え撃つぞ嶋崎覚悟はいいな！」

「今日は、本当に最低な日だよ！」

逃走（後書き）

ご感想どしどしお待ちしてまーす

羞恥（前書き）

一番長く書けました

羞恥

「今、ここで話し声が聞こえた様な気がしたんだけどなあー」

(……じゃあ作戦どうりいくぞ)

(……おう)

「先生落ち着いてください」

机の下から嶋崎がゆっくり立ち上がった

「あら、嶋崎くんやっと見つけたわよ。それで、人識くんは、何処なのかしら？」

「えっ人識？誰ですかそんな人知りませんよ」

「ほー嶋崎くんは記憶力が悪いほうじゃないと思ってましたが、まあー頭を打つ叩けば思い出すでしょう」

「先生今、教育者らしくない発言をしたような…」

「はあーこれは、飴と鞭ですよ。」

「そうですか所詮、戯言ですけどね」

嶋崎は、軽く先生の話の流れと一瞬視線を先生がふさいでいる出口の方をみてニヤリと笑うと構えて

「さっ久しぶりに初めますか」

「ええ、始めましょうか？」

二人とも弧を描くようにゆっくり近づき前に出していた手が触れそうになった瞬間、突然、二人の姿が見えなくなった。

いや正確には、二人の動きが速すぎて一般人では目がついていけなかったのだ。殺人鬼・人識でも例外ではなかった。

（なっ何だよこの速さは、一般人が、出せる速さじゃねーぞ！とにかく作戦どつりにやらねーと相手に出来ねーぞあんな化物）

人識は、嶋崎と先生が空き教室に入って来る前窓から脱出して空き教室の入り口の近くである作業を済まし待機していた。

「やっぱり逃げたほうがよかったよな……なんて殺人鬼がこんなこと言うなんて本当に傑作だぜ」

そんなことを言っていると丁度、嶋崎が技をうち出している所だった。

「古流打ち貫き・槍衝き」

掌底を先生に、あてようとすると

「……甘いすわね」

先生は、身体に掌底が、あたる前に両手で、嶋崎の掌底を止めた

「まだだあー槍衝き螺旋式」

嶋崎は、空いている右腕を下に振って体勢を低くし、捕まっている左手をコークスクリーンの要領で、外しそのまま先生の身体に、ぶつけて空き教室の入り口に飛ばす。

「行ったぞ人識！」

「待ってました！」

先生が飛んで行った方向には、人識が構えて、ちよつとひどい気はするがそのまま飛び蹴りを腹部にくらわし廊下に出す

「人識、押さえろ！」

「分かってるよ」

人識は、作戦どうりに廊下中に張り巡らしていた糸を曲絃糸でがんじがらめにして動けなくする。

「今度こそ大丈夫だろ」

人識が、安心するのもつかの間ブチブチという聞きたくない音が聞こえてくる

[illegible]

「何なんだよコイツは、こんだけの糸の束と、こんだけの力で絞めてんのに、まるで、蜘蛛の糸を切るような感じにいるんだ（……こいつあの人類最強の請負人みたいじゃねーか）」

「人識、そこを退ける！」

人識が振り向くと、嶋崎が頭と両手と口に水をいっぱいに入っているバケツを持っていた

「……お前何がしたいんだ？」

「いいからバケツを持て、持ったら先生にかける速くしないと糸が切れちまう、切れて動きだしたらもう誰も止められないぞ」

嶋崎からバケツを取り尚も凄い勢いで糸を切っていつている先生めがけて水をかけた。水をかけて先生の服が白い服だから身体に密着してブラジャーなどが透けていてもエロいところなんだが今、人識と嶋崎には、そんな余裕は、全くなかった。

「そこを退ける！」

嶋崎が何処からかちぎってきたコードを先生にめがけて投げた当然コードは、コンセントにささっており先生は、濡れているのだから感電する

コンセントからの電流を甘くみてはいけない雷よりは、全然弱い電流としてもスタンガンよりは、確実に強い電流を流している

先生は、短い悲鳴を上げて動かなくなりその十秒後にコンセントを抜いて、嶋崎は、ゴム手袋を両手につけて先生に近づき電流が残ってない事を確認するとゴム手袋を、外して先生の胸部に耳をあて心臓の音を聞き

「やっぱり止まってるな」

平然と応えた

「どうするつもりだ？」

「そりゃあ助けるさ、まずは、人工蘇生だよな」

嶋崎は、袴の袖を捲り上げ布で固定すると

「でも、久々の人工蘇生だな人識は、やったことあるか？」

「ねーよ」

人を殺す殺人鬼が、人を助けるとは、じつに滑稽な話である

「じゃあ、先生の頭を上げてくれ」

人識が先生の頭を上げると嶋崎がありえない事を始めた。

「先生、ちょっと我慢して下さいね」

嶋崎は、立ち上がって手のひらをくっつけて思いっきり先生の口に叩きこむ、何度も何度も何度も先生の口が真っ赤になると深呼吸をして

「古流・蘇生術 押し戻し」

思いっきり3回転するとそのまま拳を先生の胸部めがけてぶつけた。

「ゲホゲホ」

先生は、息を吹き返した

「そんなんでも息を吹き返すなー！！！！」

当然のように人識は、喉が潰れるくらいの大声でツッコミをいれた

「うるさいな、生き返ったからいいじゃん」

嶋崎が頬を膨らませながら言い返した

「違う、古流なんちゃらで何でも済まそうとするな」

「古流なんちゃらとは、何だ古流をバカにすんな實際あれでお前もあれで蘇生したんだぞ！」

嶋崎が、怒ったように言い返すと人識が笑い始めた

「は…はは、あはは、俺もあれで蘇生したのか……ぶっははは、本当に傑作だぜマジで笑えるぜ」

「そうかよ笑うなら笑っとけでも今から先生を、保健室に運ぶから手伝えよ」

「ああ、わかったよそんなにブスくれるなよ俺が悪かったって」

こうして嶋崎と人識の友情(?)は、深まったのかどうかは不明だが一旦終わりとする

羞恥（後書き）

ご意見・ご感想とじしお待ちしてまーす

戯言遣いと死線の蒼（前書き）

遅れてすみません

戯言遣いと死線の蒼

「友から旅行に行こうなんて誘ってくるなんて珍しいね」

「僕様ちゃんだったたまには自然豊かな空気をお腹いっぱい吸いた
いよ。いーちゃんこそ僕様ちゃんから突然よんだのによくこれたね」

「ああ大学は、丁度、夏休みだったから暇だったんだそれに友、一
人じゃマンションからでもできないだろ」

「ウニウニ、よくわかってるねいーちゃんだからいーちゃん大好き」

「そうか、僕も友の事が好きだよ」

これは、丁度、人識と嶋崎が先生の暴走を止めている頃の少し前の話

「それでこのヘリコプターは、どこに向かっているんだ？」

「ウニ、それは、内緒だって言っただよ」

今、いーちゃんと友は、どこを見ても青い青い海の上を飛んでいた。

友が言うには、島に向かっていいると言うが、何処をどう見ても水平
線が広がっていてとても島があるようには、見えない

「それに何で玖緒機関からヘリコプターなんて借りてるんだ船でも
よかったんじゃないのか？」

「魚でも無いかぎりここの海域を抜けられないんだよ」

「そんなに、ここの海域は、複雑なのか？」

いーちゃんが少し驚いたように聞き返すと友は、少し考えて話始めた

「うーん何て言うか確かにこの海域には、いろいろな生物もいるんし流れも速くて複雑なんだけど……あつ丁度見えて来た、あれがこのあたりじゃ一番危険な生物『海影』って言うて暴力の世界……あつちの世界の住人だよ」

ヘリコプターに取り付けていた友の特製品のカメラが友のカタカタと、凄い速度で入力している自分のパソコン「これも自作」でカメラを遠隔操作して画面をズームしてみると海の上に、修行僧の格好をした頭を綺麗に剃りあげている人達が水の上に立っていた

「あの水に立っている人達が海影っていうのか」

「そうだよ。おっと丁度可哀想な人達がきたよ」

友の操作しているパソコンの端に大型船が海影にちかずにいた。

戯言遣いと死線の蒼（後書き）

ご意見どしどしお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3744u/>

0 から始まる

2011年10月10日02時23分発行